

## 平氏打倒の陰謀

播磨 定男

はじめに

後白河法皇の側近による平氏打倒の陰謀が発覚したのは、平安時代末期の治承元年（一一七七）五月二十九日のことである。この時源義経は未だ十九歳、奥州平泉の藤原氏を頼つて都を離れてから三年目で、諸国の源氏が平氏打倒を掲げて蜂起する丁度二・三年前のことである。

一方、平氏は清盛を中心にまさに全盛期を迎えていた。清盛はこの九年前にすでに太政大臣を退きその後出家はしたものの、平氏一族の頭領として政局全体に睨みを利かせていた。また、皇室や有力公家との婚姻政策を進め、とくに娘徳子を高倉天皇の許に入内させるなど、かつての藤原氏と同様平氏独裁政権を目指していた。

したがって、このような時期に発生した平氏打倒の陰謀は強力な平氏の武力の前に不発のまま終了し、謀議に加わつた関係者は全員逮捕され、各々死刑・流刑などの厳しい処罰が行使された。中でも僧俊寛・平康頼・藤原成経の三人は『平家物語』<sup>〔1〕</sup>によると「薩摩瀧鬼界が嶋」に配流されたが、この鬼界島は日本地図上には存しない地名であり、これの地理上の位置をめぐっては諸説が存する。

薩摩半島の南方約五〇kmの西海上に浮かぶ硫黄島が古くから鬼界島に比定され、平成八年には流人俊寛の悲劇を描い

た歌舞伎も現地で上演された。しかし、硫黄島より遙か南方の奄美大島東側には現に「喜界島」が実在し、島内には「僧俊寛の墓」と称する遺跡も残っている。

詳しいことは後述するが、実は右の硫黄島はわが国の石造塔婆史の中で、その地理的分布上の南限に相当する地域なのである<sup>(2)</sup>。周知のように硫黄島の周辺には屋久島や種子島など硫黄島よりも遙かに面積の広い島々が存し、その南方には奄美大島を中心とした奄美群島も控えている。ところが、これらの島々では現在のところわが国中世史までさかのぼるような石造塔婆の発見は報じられていないのである<sup>(3)</sup>。

このことは薩南諸島の中でも硫黄島が他の島々とは異なつた歴史を有すること、つまりこの島の特殊性を物語っている。平氏打倒の陰謀に関わつた俊寛・康頼・成経の三人が遠流となつた「鬼界島」とは果たしてどこか。『平家物語』などの文献史料に加えて、石造塔婆の調査結果からもこの課題に言及してみたいと思ひ、この拙稿を草することにした。大方の御批正を蒙れば幸甚である。

### (一) 鹿ヶ谷の謀議

平氏打倒の謀議がはかられたのは京都東山鹿ヶ谷の僧俊寛の山荘であつたところから<sup>(4)</sup>、これらの出来事は一般に「鹿ヶ谷事件」と称されている。この山荘に集う人々は法勝寺執行の僧俊寛をはじめ後白河法皇の側近第一といわれた西光（藤原師光）、正二位権大納言の藤原成親とその子成経（丹波少将）、檢非違使・左衛門尉の平康頼、源氏の出身で藏人・伯耆守の多田行綱などであつた。

顔触れの特徴はいずれも後白河法皇の近臣たちで、新興平氏の台頭により不平不満を募らせていた人々である。彼等

は時々鹿ヶ谷の山荘で酒宴を催し、平氏の悪口を言い放つては日頃の鬱積した感情を慰めていたが、時には後白河法皇自らも同席することがあったというから宴席はさぞかし賑やかであつたらう。

メンバーの中で異色の人物は平 康頼と多田行綱である。康頼は生国阿波から上洛し尾張国守平 保盛に仕えたことから旧姓の中原氏を平氏に改めた。檢非違使に在任して後白河法皇に近づいたが、彼は今様の名手で、このことが法皇に認められる切つ掛けであつたという。一方の行綱は摂津国多田庄（兵庫県川西市）を本拠とする清和源氏の流れで、経緯ははっきりしないが源氏の武力を期待されて誘われたとも考えられる。

『平家物語』によると、事件発生の発端は「右近衛大将」の地位をめぐる争いにあつたといわれる。安元元年（一一七五）に内大臣に昇進した藤原師長は二年後の治承元年三月に兼任の左近衛大将を辞任した。この時正二位内大臣で右近衛大将を兼任していた平 重盛が、右近衛大将から左近衛大将に回つて事は平穩に運ばれたが、問題は新たに空位となつた右近衛大将の就任をめぐつて争いが生じた。数名名乗りをあげた中に鹿ヶ谷事件の主謀者となつた藤原成親がいたのである。成親は後白河法皇の近臣という立場に甘んぜず、自ら石清水八幡宮・賀茂別雷神社に参拝して地位獲得に執念を示した。ところが結果は自分より下位の従三位中納言の平 宗盛が就任することとなつたのである。宗盛は重盛の異母弟であり、この人事に父清盛の意志が働いたことは容易に想像される。苦杯を嘗めた成親の心境を『平家物語』は次のように記している。<sup>(5)</sup>

「徳大寺、花山院に超られたらむはいかゞせむ。平家の次男に超らるゝこそやすからね。是も万づおもふさまなるがいたす所なり。いかにもして平家をほろぼし、本望をとげむ」とのたまひけるこそおそろしけれ。

## (二) 主謀者の檢拳と処罰

四

叙位除目の不満に端を發した平氏打倒の謀議は、仲間の一人であつた多田行綱の裏切りによつて脆くも崩れた。行綱は治承元年五月二十九日の深夜京都西八条の清盛邸を訪ね、清盛本人に直接会つて事の次第を告げたのである。この行綱という人は複雑な行動をする人物で、この後寿永二年（一一八三）には平氏打倒の軍事行動を展開し、源義経と一緒に一の谷合戦で勝利をおさめたりしているが、二年後には頼朝と対立して西国に向かう義経一行を摂津国河尻で襲撃したりしている。行綱は一旦は平氏打倒の陰謀に加つたものの、平氏の天下は容易に覆えないと判断し、密告に転じたのである。

陰謀の事実を知つた清盛は早速一族郎党に号令を發した結果、西八条邸にはその夜のうちに兵共六、七千騎が駆けつけたという。翌六月一日早朝西光が逮捕されたのに続けて藤原成親が誘き出されてそのまま身柄を拘束された。西光の自白により俊寛、平康頼など関係者は忽ち捕縛されたが、この時西光は清盛を口汚く罵つたためにその場で斬られ、子二人も配流先で殺害された。また、成親は備前国に配流、成親の子成経、俊寛、康頼の三人は西海の離島鬼界島へ遠流、その他の逮捕者は各々配所に遷された。

事件発端の当事者である成親の処罰が他より軽いのは彼の妹が平重盛の妻であり、娘がまた同維盛（重盛長男）に嫁していたために罪一等を減せられて流罪となつたのである。しかし、成経・俊寛・康頼に対する処分は重罰である。わが国の刑罰を規定した日本律によると、流刑中の遠流に定められた配流先は伊豆・安房・常陸・佐渡・隱岐・土佐の六国である。<sup>(6)</sup> 各国司に監視させ、期間は赦のあるまで無期というのが一般的で、これに比べれば成経以下の処分は嚴罰以外の何物でもない。生きて死を味わせようとする憎しみに満ちた処分である。

ところで、これまで述べた一連の出来事は一般に「鹿ヶ谷事件」と呼称されている。日本史上に生じた何々事件といわれるものと比較して、果たして異質性が存しないであろうか<sup>7)</sup>。すでに述べた如く、後白河法皇の側近グループによって平氏打倒の謀議がなされたことは事実である。しかし彼等の陰謀は実行されずに不発に終わった。主謀者側に相手を打倒するための策略や計画、何よりも軍事的な備えがあつたかについても疑問であり、事件と称するには全くお粗末な結果に終止したのである。

『平家物語』を見ると、多田行綱が密告の際「此程院中の人々の兵具をととのへ、軍兵をめされ候をば何とかきこしめされ候」と云い<sup>8)</sup>、成親が後白河法皇の名を語つて軍兵を集めていると告げている。これらから推理すると法皇の身辺を警護する北面の武士に声をかけ事件に引き込もうとした形跡も窺えるが、行綱の証言は密告という特殊な情況下でなされたことを考慮しなければならない。また、謀議が発覚した前後の成親の行動も注目されるが、逮捕時の彼は主謀者には全く似付かわしくない態度であつた。清盛が遣わした誘き出しの使者に会しても、未だ自分たちの陰謀が発覚したことに気付かなかつたといわれる。清盛が後白河法皇に対し何か頼み事があり、その件で自分を迎えるによこしたと勘違いしていたという。したがつて成親は訳も分からぬまま誘き出され、そのまま身柄を拘束されることとなつたのである。

主謀者側とは対照的に素早い反応を示したのが平氏側である。密告のあつたその夜のうちに軍兵六、七千騎を集めたとする『平家物語』の記述には誇張があるにしても、事態に対する敏速な対応と統率力には都人を驚愕させるものがあつた。また、即刻に関係者を逮捕し厳罰に処したことも武家政権としての面目を内外に示したものと見えよう。ただ、平氏側のこうした強力な過剰なまでの対応が単なる謀議でしかなかつたものを事件にまで発展させたことも否めない。換言すれば、後白河法皇の周囲に居た新興平氏に不満をもつ人々を、まとまつた反平氏勢力として実体を形成せしめたのである。

『平家物語』を読むと、清盛は後白河法皇がこの謀議にどの程度関与しているかに強い懸念を抱いていたことが知られる。法皇の動き如何では騒動や事件に発展する可能性を秘めていたからである。多田行綱の密告の際も清盛は真つ先に「さて夫をば法皇もしろしめされたるか」と問い質したと記している<sup>9)</sup>。行綱は「子細にや及び候。成親卿の軍兵めされ候も、院宣とてこそめされ候へ」と答え、法皇の関与を認めたが、西光もまた取り調べの中で法皇が謀議の中心に居ることを白状した<sup>10)</sup>。

これを受けて清盛は遂に法皇の幽閉を決意し軍勢を召集したが、このことを聞き付けた嫡子重盛が急ぎ清盛邸に駆け付け、父と対面した。重盛は烏帽子・直衣の装束で駆け付けたのに清盛は腹巻き姿であったという。さすがに気恥かしいと思ひ慌てて腹巻きの上に法衣をつけ父子の対面となったが、この席で重盛は父の行動が仏教はおろか儒教の教えにも背くこと、平氏の繁栄はひとえに朝恩によることを説き、父の軽拳を戒めたといわれる。清盛が力の論理で物事を処理しようとするのに対し、重盛は物事の道理を説き、そのために後白河法皇の事件への関与は不問に付されることとなった。しかし法皇はこの後も藤原氏と結託し反平氏活動を展開したために、二年後の治承三年（一一七九）十一月には清盛によって鳥羽殿へ幽閉された。重盛が四十二歳で病死したその三ヵ月後のことである。

### (三) 主謀者の配流

藤原成親は平氏との姻戚関係から罪一等を減ぜられて備前国へ流罪となった。京より舟で淀川を下り大物浦（兵庫県尼崎市）から海路備前国児島に移された。間もなく児島から有木の別所（岡山市）に所替えとなり一ヵ月ばかり過ぎて暗殺された。現地には石囲いの中に石塔を二つ重ねた藤原成親の墓（県史跡）が現存する。

また、僧俊寛・平 康頼・藤原成経の三人は薩摩瀧鬼界島へ遠流となり、配地に赴く途中康頼が周防国熊毛郡室積（山口県光市室積）において出家し法名を性照と称したこと、またその時作つたとされる和歌一首が『平家物語』に収録されている<sup>(11)</sup>。

つるにかくそむきはてける世間を

とく捨ざりしことぞくやしき

地元の記録によると、康頼が出家の際導師に依頼したのは入道寺開祖の活堂玄機和尚であると云い<sup>(12)</sup>、入道寺はその後潮松庵と改号し普賢寺の北隣りに旧在した（明治三年廃寺）。残された康頼の碑石類は現在普賢寺境内に移転されているが、いずれも江戸時代に造立されたもので『平家物語』の記述を裏付けるような遺品は存しない。

右の『平家物語』に対して『源平盛衰記』によると、康頼の出家した場所は撰津国小馬林という所で、現地の僧に請じて出家し、法名を性照と云い、前出の和歌一首を作つたことが記されている<sup>(13)</sup>。康頼の出家が撰津国を離れる際になされたか、若しくは航海の途中であつたかについては依然不明であるが、長門本『平家物語』には藤原成経を乗せた船のコースが記されている<sup>(14)</sup>。成経は一旦備中国に配流された後に鬼界島へ向けて船出しており、そのコースは備中国瀬尾湊<sup>(15)</sup>（岡山市妹尾）く伊予国夏地<sup>(16)</sup>（愛媛県三崎町）く豊後国米津浦<sup>(17)</sup>（大分県米津村）く日向・大隅国の東岸く薩摩瀧鬼界島の順となつている。康頼を乗せた船が瀬戸内海から豊後水道へ真つ直ぐに進むようだと、室積港のある山口県光市はコースから大分外れる。海が荒れ船が西方に流されない限り寄港の可能性は低いと言えよう。

さて、俊寛・康頼・成経の三人が配流された鬼界島とはどんな所か。『平家物語』には島の様子について具体的な記述が見られる。船も通わぬ孤島であること、偶には島の住人に会うが、肌の色は黒く毛が生えてまるで牛の如くであること、山や平地があつても耕すことをしないから米穀などは無く、住人は魚貝類や獣を捕つて生活していることなど<sup>(18)</sup>、

余所者にとつて到底住めそうにない孤島であるために、流刑の三人はこの世の地獄を経験させられるのである。そうした中でも唯一の救いは成経の舅の平 教盛（清盛の弟）が肥前国鹿瀬庄（佐賀市嘉瀬町）に所領があり、そこから時々衣食の仕送りをしてくれることであつたという。

康頼と成経は熊野権現を勧請し熱心に帰京を祈念した。また、卒塔婆を千本も作り海に流したところそのうちの一本が偶然にも安芸国嚴島に漂着したという。このことは都でも評判となり清盛の耳にも届いた結果、翌治承二年（一一七八）暮れには赦免船が鬼界島に仕向けられることになった。流人の三人は狂喜して赦免船を迎えるが、清盛が発給した赦免状には康頼と盛経の二人の名のみで俊寛の名前はどこにも見当らなかつた。俊寛は帰還を許されなかつたのである。半狂乱になつて船に縋りつく俊寛、これを引き離そうとする船役人、劇曲「俊寛」で馴染の場面が展開される。独り島に残された俊寛はその後食を断ち念仏を唱えながら死去したといわれる。「か様に人の思歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ」『平家物語』作者の言葉である<sup>(19)</sup>。

#### （四）薩摩潟鬼界島

ところで、俊寛・康頼・成経の三人が配流された「鬼界島」とは一体どこの島だろうか。『平家物語』に薩摩潟とあるから現在の薩南諸島辺にある特定の島を指すであろうが、実は鬼界島と名のつく島は日本の地図上に存在しない。したがつて実在する島の別名か旧名となるが、『平家物語』にはこの島の様子について次のような具体的記述が見られる<sup>(20)</sup>。

嶋のなかにはたかき山あり。鎮に火もゆ。硫黄と云物みちみてり。かるがゆへに硫黄が嶋とも名付けたり。

鬼界島は硫黄が島の別名であるとする有力な証言であり、これに相当するであろう硫黄島は確かに地図上に現存する。



硫黄島は薩摩半島の南方約五〇kmの西海上に浮かぶ島で竹島・硫黄島・黒島の三島が合併して現在は鹿児島鹿兒島郡三島村と称している。島の周囲は一四・五km、面積は約一二km<sup>2</sup>と狭いが、島の東半分には硫黄岳（標高七〇三m）があり噴煙をたなびかせている。島内には温泉が無数に噴き出しているため島周辺の海の色は硫黄分の濃い黄緑色に変色し、まるで黄海のようであるところから鬼界島となったのではと地元民は説明する。また、現地には僧俊寛堂と称する俊寛をまつた石祠も現存している<sup>(21)</sup>。

右の硫黄島説に対し異議を唱えているのが喜界島の人々である。喜界島は奄美大島の東二五kmにある周囲四八km、面積五六km<sup>2</sup>の島で、現在は鹿児島県大島郡喜界町と称している。喜界島は古くから文献にも見え「爾加委」（日本書紀）「貴賀島」（日本紀略）「貴海島」（吾妻鏡）、「岐浦島」（李朝実録）「鬼界島」（琉球国郷帳）などと記されている<sup>(22)</sup>。もともと平家落人伝説で有名な島であるが、島内には僧俊寛の墓が存在し、発掘調査した際副葬品と人骨が出土した。この人骨の鑑定を専門家に依頼したところ「流罪となった貴人の遺骨で、人類学的には俊寛を否定できない」という結果を得ており<sup>(23)</sup>、地元では『平家物語』に出てくる鬼界島は自分たちの島であるという本家意識が強い。

鬼界島は硫黄島か喜界島か。島の様子を述べた前出『平家物語』の記述によると、硫黄島が優位であるように思われるが、長門本『平家物語』には「鬼界島八十二島ナレバ云々」と記し<sup>(24)</sup>、また『源平盛衰記』でも<sup>(25)</sup>

薩摩方トハ総名也。鬼界八十二島ナレヤ。五島七島ト名附タリ。

と、鬼界島は薩南諸島にある特定の島を指すのではなく、その全体を称することを告げている。その全体とは大隅諸島に属する竹島・硫黄島・黒島・屋久島・種子島の五島と、吐噶喇列島に属する口之島・中之島・諏訪瀬島・悪石島・小宝島・宝島・横当島の七島の計十二島のことを指している<sup>(26)</sup>。口之島、奥の七島といった表記も見られる。

したがって、これらの記述によれば鬼界島の位置は薩南諸島全体に及ぶ広範囲の地域となり、当然前記喜界島説もそ

の島名や遺跡の他に文献的な裏付けを得られたことになる。『平家物語』で有名な鬼界島は果たしてどこか。膠着状態にある議論を打破するにはこれまでとは別な分野からアプローチする必要がある。その具体的な方策の一つが、大隅諸島・吐噶喇列島・奄美諸島からなる薩南諸島における石造塔婆の造立分布状態の調査である。五輪塔や角塔婆、板碑などの遺存が果たしてどの地域辺まで確認されるか。また、その造立年次はいつ頃までさかのぼるかなどの具体的な事実を把握した上で、更に本題に迫ることにしたい。

### (五) 硫黄島の石造塔婆

竹島・硫黄島・黒島の三島からなる鹿児島県三島村の石造物について報告がなされたのは今より三十三年前、当時竹島中学校に在職していた松永守道氏によってである。氏は三島村内を隈無く調査され、その成果を『三島村秘史』として昭和四十七年に公刊された。

これによると三島村の中でも中心をなすのは硫黄島で、島内には十三基の石造塔婆が遺存し、そのうち七基が板碑である<sup>(27)</sup>。有銘最古は正安三年(二三〇一)銘の方柱形をした角塔婆で、高さ一五〇cm、幅三三cmの方柱形塔身の上に高さ四〇cmの相輪をのせている。塔身上部の四方にア・アー・アン・アクの胎藏界四仏種子を刻み、正面下方に「正安三年六月十日ノ孝子敬白」と記している。地元では安徳天皇の皇子隆盛親王がこの島で正応五年(一二九二)に死去し、この九年後に隆盛の子長浜権太夫吉寿が亡父の供養のために造立したものと解しているが、安徳天皇の死没地を含め真偽のほどは定かでない。

板碑の最古は天授二年(一三七六)銘の整形品で、全高一一五cm、幅二五cmで将棋の駒型をしている。頭部山形・横

二条の彫り込みの下に額部を設け、塔身正面にバン（金剛界大日如来・ウーン（阿閼如来）の二種子を縦に彫り、その下に「天授二年<sup>四</sup>」と紀年を刻している。これもまた平氏の供養塔と伝えるが造立趣旨・造立者などは未詳である。右に続く板碑は応永十四年（一四〇七）銘。同二十年（一四一三）銘が各一基、同三十三年（一四二六）銘二基の計四基で、無紀年銘のものも二基存する。また、五輪塔も四、五基確認されているがいずれも無銘であることは誠に残念と言わざるを得ない。

さて、右に紹介した石造塔婆は硫黄島以外の島々にも見られるだろうか。薩南諸島の中には屋久島や種子島をはじめ奄美大島・徳之島など硫黄島より面積も遙に大きく、歴史的にも早くから開けた島々が存する。これら薩南諸島の板碑文化について、地元鹿児島県庁に勤務され永年研究に携わってこられた河野治雄氏は、次のように述べている<sup>28</sup>。

今のところ南方の島々の板碑の存否については三島村まで確認されており、それ以南の種子島・屋久島・奄美の諸島には確認がなされていない。ただ南種子島の山中に自然石に不動の種子を刻した自然石があり、大島本島の笠利町に種子を彫した塔婆が建っているが、いずれも江戸期のものである。

薩南諸島の中でも板碑の存在が確認されるのは硫黄島だけであるという指摘は重要である。氏は板碑に限って発言しておられるが、管見では他の石造塔婆についてもこれまでに発見の事例が報じられていないことを付加すると、硫黄島は板碑を含むわが国の石造塔婆の造立分布上、その地理的な南限と称しても過言ではない。

硫黄島で石造塔婆が造立された理由について、地元では安徳天皇や平氏一門と関連づけて考えておられるようだが、勿論こうした理解の背景には地元で平家落人の伝承が根強く残っているからである。しかし、その真偽は別として平家落人の伝承はこの硫黄島だけに存するのではない。硫黄島以外の竹島や黒島にも存し、三島村より遙か南の海上に浮かぶ喜界島まで及んでいることはすでに述べた。したがって、平家落人の伝承以外の要因が硫黄島にある石造塔婆の背後

に働いていると考えねばならない。

このことは硫黄島が日本本土の仏教文化の影響を直接受けるような、何か特別な状況下にあつたことを意味している。換言すれば石造塔婆を造立するということは薩南諸島に住む人々の一般的な習俗ではないのである。例えば長門本『平家物語』に「喜界八十二ノ島ナレハ、口五島ハ日本ニ從ヘリ。奥七島ハ我朝ニ從ハストイヘリ」とある<sup>29</sup> ことから、琉球文化が奄美諸島から吐噶喇列島まで及んでおり、大隅諸島などもその影響下にあつたものと推定される。そうした中で硫黄島だけに仏教文化が波及していることは、日本本土から直接に文化を移入するような歴史的事情が潜んでいたとしか考えようがない。そしてこの事情こそが、本土から度々送り込まれる重罪者の流刑地としての役割と機能であり、その流刑者たちによつて本土の石造塔婆文化がこの地にもたらされたと推定されるのである。先に流人の康頼と成経の二人が、帰京を祈念して千本塔婆を作りこれを海に流したことを紹介したが、もし史実であればこれなどは右の説明に合致した、その象徴的出来事と言えよう。

#### (六) 造立の歴史的背景

ただ気懸かりなことは、俊寛以下の三人が硫黄島に流刑となつた治承元年(一一七七)からこの地で石造塔婆が初見する正安三年(一一三〇)までの間が一二四年間も存することである。石造塔婆は一般的に故人の追善供養を目的として造立されると言つても、俊寛と現地の石造塔婆との間に直接の因果関係を想定することは困難であろう。したがつて、源平合戦も終了した鎌倉時代以降の史実が重要となるが、源頼朝は文治二年(一一八六)十二月十日、天野遠景を筑紫奉行に任じて西国に遁げ隠れた平氏残党の追討を下命<sup>30</sup>、また翌三年九月廿二日には宇都宮信房を九州に遣し、遠景

と二人で薩南諸島の搜索を始めさせている<sup>(31)</sup>。

これらから推察すると、源平合戦の直後に西海諸島へ落ち延びた平氏残党もいたであろうし、また彼等を捕えるために島に来てそのまま本土へ帰らずに島に土着した者もいる<sup>(32)</sup>。したがって、鎌倉時代に入ってからからも本土幕府政権と硫黄島とは人的な交流があり、その過程の中で新文化が流入したとも言えるが、一方では硫黄島が以前と同様遠流の島としての機能を果たしていたことも看過し得ない。因みに鎌倉時代以降硫黄島へ配流された人物を拾い上げると、先ず正嘉二年（一二五八）八月に平内左衛門尉俊職が同僚との所領争いから殺害に加わり硫黄島へ流罪となっている<sup>(33)</sup>。この俊職について『吾妻鏡』は「平判官康頼入道孫」と割註をしている。つまり俊職は姓を平内に変えてはいても平康頼の孫なのである。彼は執権北条時頼代に鎌倉幕府に出仕していたが、右の事件に関係して祖父が流されたと同じ地に配流されたのである。

また、硫黄島は文観僧正が流された場所としても夙に有名である。鎌倉時代末期の元徳元年（一二二九）、後醍醐天皇は真言律僧の文観をはじめ法勝寺の円観上人、浄土寺の忠円僧正などに北条氏滅亡の調伏をさせた。しかし同年五月には調伏の事実が発覚して関係者が捕縛され、文観を硫黄島、忠円を越後国へ、円観は遠流を弛めて結城上野入道に預けて奥州へ流した。文観は元弘三年（一一三三）に鎌倉幕府が倒れると硫黄島から帰還し、東寺大勧進や醍醐寺座主にどに就任しているが、四年間硫黄島で流人生活を送っている<sup>(34)</sup>。

平内俊職や文観のように鎌倉時代以降も日本本土から硫黄島へ、縦え時々であつたにしても流人が送られていることは重要である。しかも彼等流人たちは鎌倉幕府やこれに続く建武新政の表舞台で活躍すると同時にその時代の文化を十分に保持していた人たちである。その彼等が罪人として西海の孤島での生活を強いられた時、何よりもまず神仏に縋り一日でも早い帰京を祈願したであろうし、その現地の様子は『平家物語』に描かれた康頼や成経の姿と重なる。康頼・

成経の生きた平安時代末期は石造塔婆の造立も未だ初発期の段階であったが、続く鎌倉・南北朝時代に入ると全国的な展開と同時に最盛期を迎える<sup>(35)</sup>。したがって、これらの時期に彼等流人たちによつて硫黄島へも板碑をはじめとする石造文化が流入した可能性が最も高く、またそのように考えるのが穏当であるように思われる。

### むすびに

世間では石造塔婆について、これらは故人を埋葬した古墓と解する人も結構いる。事実硫黄島の石造塔婆を最初に紹介した松永氏も島内にある遺品を特定個人に結びつけて説明しておられるが、石造塔婆造立の第一義は仏や菩薩を安置供養することであり、造立の仏縁によつて仏の功德を得たいとする願いが優先する。石造塔婆の中でも仏像や経典を安置する仏像塔・経塔が時代的に早く出現するのはそのためである。しかし造塔の功德が強調されるとともに、この功德を故人に回向する考えが広まると墓塔の出現を見るに至る。

硫黄島の石造塔婆、中でも板碑を概観すると、応永年間に入つてからの数基は正に右の墓塔として造立されたものである。これに対し最古の天授二年銘は板碑本来の造立目的を具現した本格的遺品である。したがって、これを後世のものと同視して、島内に住した特定故人の墓などと限定して解すべきではない。罪人として硫黄島に流され、配流中に本土への帰還を祈念し造立した可能性も十分考えられるのである。

硫黄島の板碑は、現在全国各地から発掘されている六万基もの同一遺品の中で地理的に最も南の位置にあり、しかも一方では琉球文化との接点を有するが故に学問的興味は尽きないのである。

(平成十七年三月十四日稿)

## 註

- (1) 特に断りがない場合は刊本として広く流布している日本古典文学大系本の『平家物語』上・下巻(岩波書店、昭和四十四年)を指す。
- (2) 播磨定男『中世の板碑文化』(東京美術、一九八九年)九三頁。
- (3) 石造塔婆の中でも五輪塔などの存在は報じられているが、いずれも江戸時代に入ってから造立品である。
- (4) 僧慈円の『愚管抄』にはこの山荘の持ち主について、蓮華王院執行の浄賢法師(信西の子)の所有であったと『平家物語』とは違った記述がみられる。しかし、浄賢は後白河法皇の行幸に随伴して鹿ヶ谷の山荘をしばしば訪れているから、事件発生時の持ち主は通説の如く法勝寺執行の俊寛とすべきであろう。
- (5) 前掲『平家物語』上、一三三頁。
- (6) 増補国史大系『続日本紀』(吉川弘文館、昭和四十七年)前篇、一〇〇頁。
- (7) 最近では「鹿ヶ谷謀議」と記される識者も見受けられる。同様の視点に立つ見解と見えよう。
- (8) 前掲『平家物語』上、一五一頁。
- (9) 同右書、一五一頁。
- (10) 九条兼実『玉葉』(名著刊行会、昭和五十四年)第二、五一頁。
- (11) 前掲『平家物語』上、一九八頁。
- (12) 『防長寺社由来』(山口県文書館、昭和五十七年)第二卷、二二三頁。
- (13) 『改定史籍集覧』(臨川書店、昭和五十九年)編外三、三三八頁。
- (14) 同右書、三三九頁。
- (15) 瀬尾は妹尾とも書き、笹瀬川と足守川の合流点の南西に位置する。瀬戸内海沿岸が埋め立てにより現在は陸地に入っている。(『角川日本地名辞典』33、六三五頁)
- (16) 伊予国夏地の地名は地名辞典などに記載されていない。ただし、伊予灘側の「二名津」は宇和海側の佐田と共に早くから開けた場所、古くは二間津とも称した。(同右書38、一〇〇一頁)
- (17) 米水津浦は豊後水道に面する米水津湾沿岸に位置し、現在も村名として残っている。(同右書44、八六九頁)
- (18) 前掲『平家物語』上、一八六頁。ただし、こうした鬼界島の叙述は『保元物語』の「為朝鬼嶋渡事」と類似していることから、先行書を参考にしたとも考えられる。

- (19) 同右書、二三九頁。
- (20) 同右書、一八六頁。
- (21) 朝日新聞「げいのう舞台再訪」
- (22) 前掲『角川日本地名辞典』46、二三三頁。
- (23) 前掲「げいのう舞台再訪」
- (24) 前掲『改定史籍集覽』編外三、三四二頁。
- (25) 同右書、三四三頁。
- (26) 吐噏喇列島の各島は前記三島村と同様、現在は鹿児島県鹿児島郡に属し十島村と称している。
- (27) 松永守道『三島村秘史』（鹿児島県大島郡三島村役場、昭和四十七年）一二〇頁。尚、島内には石造塔婆がもつと存したが昭和三十一年に硫黄採取の工場が建設された際破壊されたといわれる。
- (28) 坂詰秀一編『板碑の総合的研究』（柏書房、一九八三年）Ⅱ地域編、三八六頁。
- (29) 前掲『改定史籍集覽』編外三、三四三頁。
- (30) 新訂『国史大系』『吾妻鏡』（吉川弘文館、昭和四十八年）第一、二四九頁。
- (31) 同右書、第一、二七三頁。
- (32) 前掲『三島村秘史』七八頁。
- (33) 前掲『吾妻鏡』第四、七〇七頁。
- (34) 『国史大辞典』（吉川弘文館、平成四年）第十三卷、八八七頁。
- (35) 前掲『中世の板碑文化』四〇頁。

#### △付記V

本稿は平成十七年二月二十六日に、周南市立中央図書館で講演した内容に後日加筆したものである。講演の際は同館次長の花田佳子氏に何かと御高配を頂いた。記して感謝の意を表したい。